茨城県稲敷郡江戸崎町

楯の台古墳群

第2 · 3 次発掘調査報告書

2001

江戸崎町教育委員会山武考古学研究所

発刊に寄せて

古い歴史と伝統を持つ江戸崎町には、数多くの遺跡が残されています。平成10・11年に行われた町内埋蔵 文化財包蔵地分布調査により、遺跡数が従来の3倍に相当する161ケ所に及ぶことが確認されました。今後、 それらの遺跡が発掘調査され、古代の江戸崎町の様子が、次々と明らかになり江戸崎の歴史や文化研究の資料になることを想定すると極めて貴重な価値を持つことになります。

その価値ある江戸崎町の遺跡の一つに、今回楯の台古墳群(2・3号墳)及び、十数軒の住居跡や出土遺物が加えられることになりました。本書は、有限会社伸東興業の土砂採取事業に伴い、平成10~11年に町教育委員会が山武考古学研究所に発掘及び整理を依頼し実施された調査の報告書であります。

これを機会に、文化財に対する認識が益々深まり、これらを通じて郷土を愛する心が培われるよう希望するものです。最後に、本書をまとめるまでに、多くの方々のご協力とご支援を頂きました、それらの方々に 哀心からお礼を申し上げて、発刊の言葉といたします。

平成13年3月

江戸崎町教育委員会 教育長 朝比奈克已

例 言

- 1. 本書は、土砂採取事業に伴い事前調査が行われた、茨城県稲敷郡江戸崎町に所在する楯の台古墳群(町遺跡番号022)の第2・3次発掘調査報告書である。
- 2. 調査は、(前伸東興業の委託を受けた山武考古学 研究所が江戸崎町教育委員会の指導のもと実施 した。
- 3. 遺跡の所在地・面積・期間・担当者は下記の通りである。

所在地 江戸崎町大字佐倉字楯の台2728外(2次) 江戸崎町大字佐倉字楯の台1926-7外(3次)

面 積 1,470m²(2次) 1,950m²(3次)

期 間 平成10年10月24日~平成11年2月6日(2次) 平成11年11月4日~平成11年12月4日(3次)

担当者 平岡和夫 高野浩之

- 4. 本書の編集及び整理調査は、間宮正光・高野浩 之が担当し、平岡和夫が総括した。
- 5. 調査に際しては、下記の諸氏・諸機関にご指導 ご協力を賜った。(敬称略・順不同) 木村謙一 廣澤登 井戸賀信夫 吉田芳男

茨城県教育委員会 (有)伸東興業 開成測量(株) 江戸崎町文化財保護審議会

目 次

発刊に寄せて

例言日次

110		
I	調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 1
II	調査の方法と資料の取り扱い	. 1
Ш	歷史的環境	
	江戸崎町の遺跡	. 5
	楯の台古墳群の概要	- 7
IV	検出された遺構と遺物	
	遺構と遺物の概要	·11
	古墳	·15
	集落	.19
	城館	.33
V	所見	.34
抄釒	*	

調査参加者(順不同)

沼崎徳治 河村武森 足達三郎 外村正夫 木野内達子 浦橋邦夫 宮本松子 篠崎みつい 田中カヤ 吉田教子 赤井スミ 池田たか 柏尚江 木村節子 吉田京子 古川岳彦 高橋美和 山本諭 小野寺勝美 小角みや子 荒井ルリ子 坂本実 石井百々子 佐藤洋子

Ⅰ 調査に至る経緯

平成10年7月3日に有限会社伸東興業から土砂採取事業計画に伴う埋蔵文化財取り扱いの照会があり、周知の遺跡である楯の台古墳群の2・3号墳にかかるため、8月25日に町文化財保護審議会を開き、予定地の踏査及び昭和61年に刊行された『楯の台古墳群発掘調査報告書』(第1次)の4~7号墳との関連性などについて検討され、事前の調査の必要性が指摘された。その旨を事業者に回答をし、協議が重ねられ、事前の発掘調査を実施して、記録保存することに決定した。

次いで、山武考古学研究所に調査日程の調整を依頼するなど調査の準備が進められた。そして、11月に調査計画もでき、茨城県教育庁文化課文化財担当の指導助言を受け、山武考古学研究所への委託契約も整い県への埋蔵文化財発掘調査の届け出を経て、10月24日から翌年2月6日まで第2次発掘調査が開始された。

更に、平成11年5月31日に同社から土砂採取事業の隣接地への拡張計画が表明され、従前の経過を経て、9月に確認調査の結果、遺構の存在が判明し、関連遺跡との位置付けによって、11月4日から12月4日まで第3次発掘調査が行われた。

なお、1号墳に隣接する土塁及び堀状の部分については、試掘の結果、中世の防御施設(佐倉楯)の遺構 との判断から、計画を変更し、現状保存することとなった。 (江戸崎町教育委員会 平田満男)

Ⅱ 調査の方法と資料の取り扱い

発掘調査に先立って、楯の台古墳群が立地する台地の踏査を行ったところ、従来周知されていた古墳2基に加えて集落跡の埋蔵が想定された。第2次調査では、2・3号墳を、第3次調査では、集落跡確認のための試掘を実施し、遺構が認められたことにより、この部分を拡張し調査を行った。更に、台地東部分の開発が予定され、この地区は、城館の主郭部にあたり、城館に伴う櫓台の可能性が高いものの8号墳が位置していた。このため、事業者の協力を得て、江戸崎町文化財保護審議会を中心として試掘調査を実施したが、空堀跡が確認されたことで、開発区域から除外することとなった。

調査は、公共座標及び水準点を設置し、これを基準に進めた。

古墳については、現況測量により、2号墳が円墳、3号墳が前方後円墳と想定され、東西南北方向に十字にトレンチを掘り下げ調査を開始した。掘り下げにより封土の状況を確認した後、表土の除去に取りかかり、主体部については、実測と写真撮影により記録を取りながら慎重に進め、航空写真を撮影した。

住居跡及びその他の遺構については、堆積土層を観察しながら、土層断面図・遺物分布図・平面図などの 実測と写真撮影とで調査工程を随時記録した。

整理調査は、発掘により得られた資料と遺物収納箱35箱分の出土遺物を対象に実施した。調査が土砂採取事業で、資料数が多いことから紙面上の制約があり、このため、整理調査は成果報告は言うまでもないが、その後の調査資料の活用に重点をおいた。報告書の作成にあたっては、調査記録の簡潔な提示に主眼をおき、古墳・集落・城館に分けて記載し、特に集落は、各住居跡を時期毎に掲載した。遺物については、器種構成の明示を目的とし、時期の判断には、須恵器に重きをおいた。なお、挿図の縮尺及び凡例は、その都度図中に示している。遺物の取り扱い及び注記の仕様などの詳細は台帳に記載しているが、遺物の水洗については、鉄製品を除いたすべてに対して行い、注記は可能な限り実施した。接合・復元は、その後の展示などの活用と、調査記録としての個体数把握のため、報告書使用の有無にかかわらず行っている。これらの資料については、本書作成後、台帳により検索可能な状態で、江戸崎町教育委員会が保管している。



第1図 江戸崎町の遺跡 国土地理院作製2.5万分の1『江戸崎』を5万分の1に縮小

第1表 江戸崎町の遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所 在 地	種類	遺跡番号		所 在 地	種 類	遺跡番号	+	所 在 地	種 類
001	江戸崎城跡	江戸崎字大宿甲3194外	城館跡	055	池平遺跡	佐倉字池平1407-1外	包蔵地	109	堂ノ上遺跡	村田字堂ノ上868外	包蔵地・貝塚
002	見晴塚古墳	江戸崎字原乙602外	包蔵地・古墳	056	秋平遺跡	佐倉字秋平2122外	集落	110	- 塙遺跡	村田字塙544-1外	包蔵地・貝塚
003	豆薬師遺跡	江戸崎字豆薬師乙426外	包蔵地・古墳	057	思川久保遺跡	佐倉字秋平2153外	集落	111	羽賀栗山遺跡	羽賀字栗山575-2	包蔵地
004	明神貝塚	犬塚字三本松1248外	包蔵地・貝塚	058	中佐倉貝塚	佐倉字中佐倉1779外	集落・貝塚	112	山後古墳	村田字山後301	古墳
005	吹上貝塚	江戸崎字法蓮坊甲526外	貝塚	059	宮山遺跡	鳩崎字宮山860-1外	包蔵地	113	山後遺跡	村田字山後537-1外	防塁
006	村田貝塚	村田字山後26外1	貝塚	060	天神久保遺跡	佐倉字天神久保1626-1外	包蔵地	114	高野遺跡	羽賀字高野1296-1	墓地
007	亀ケ谷城古墳	羽賀字新畑1352	古墳	061	城ノ内遺跡	佐倉字城ノ内1665-1外	包蔵地・城館跡	115	荒地平古墳	羽賀字荒地平1321	古墳
800	荒地古墳	羽賀字荒地1268-1	古墳	062	長塚遺跡	佐倉字長塚330外	包蔵地	116	観音前遺跡	羽賀字観音前940外	包蔵地
009	木納場古墳群	羽賀字木納場1616	古墳群	063	松葉様遺跡	佐倉字松葉様2397-11外	包蔵地	117	池台遺跡	松山字池台1826外	包蔵地
010	大塚古墳	羽賀字大塚1881外	古墳	064	原迎遺跡	佐倉字原迎2467-3外	包蔵地・古墳	118	香取台遺跡	松山字香取台2338外	包蔵地
011	権現塚古墳群	下君山字羽黒1726外	包蔵地・古墳群	065	佐倉原遺跡	佐倉字佐倉原3119外	包蔵地	119	桜塚遺跡	下君山字桜塚2884外	包蔵地
012	下君山廃寺跡	下君山字富士台2521外	寺院跡	066	寺山遺跡	佐倉字寺山2970外	包蔵地・貝塚	120	小山遺跡	下君山字小山2834外	包蔵地
013	浅間山古墳群	沼田字東前1106-1	古墳群	067	水神峯古墳	佐倉字水神峯2094-1	古墳	121	地福院跡	下君山字羽黒1718	寺院跡
014	神田道貝塚	小羽賀字神田道690外	包蔵地・貝塚	068	権現台遺跡	古渡字権現台2536外	包蔵地	122	明神台遺跡	下君山字明神台2646外	包蔵地
015	自穢前遺跡	沼田字自穢前2361-外	包蔵地・古墳	069	佐倉原南遺跡	佐倉字佐倉原3061外	包蔵地・生産跡	123	岩ノ内遺跡	下君山字岩ノ内1783外	包蔵地
016	大夫屋敷遺跡	沼田字大夫屋敷1856-2	包蔵地・古墳	070	外浦古墳	江戸崎字外浦458-35	古墳	124	宮台遺跡	下君山字宮台2292外	包蔵地
017	南平貝塚	佐倉字南平2350外	貝塚	071	新山西遺跡	江戸崎字新山甲841外	包蔵地・古墳?	125	木瓜台遺跡	下君山字木瓜台2352外	包蔵地
018	山中貝塚	佐倉字山中1522外	貝塚	072	新山遺跡	江戸崎字新山甲962外	包蔵地	126	原ノ前遺跡	下君山字原ノ前2158外	包蔵地
019	天神山古墳	佐倉字山中平1621	古墳	073	犬塚遺跡	犬塚字鹿島神社1395外	防塁·塚?	127	森戸城 (二条城)	上君山字森戸台2080外	城館跡
020	小松川貝塚	佐倉字小松川896-2外	貝塚	074	八幡台遺跡	犬塚字八幡台1176-1外	包蔵地	128	上君山栗山遺跡	上君山字栗山3300-1外	包蔵地
021	殿屋敷遺跡	佐倉字殿屋敷1509-2外	古墳・城館跡	075	大門遺跡	犬塚字大門553-1外	包蔵地	129	中根台遺跡	上君山字中根台3020外	包蔵地
022	楯の台古墳群	佐倉字楯の台1925-1外	集落·古墳群·城館跡	076	荒野遺跡	犬塚字荒野467外	包蔵地	130	根古ヤ台遺跡	上君山字根古ヤ台2901外	包蔵地
023	佐倉原古墳群	佐倉字佐倉原3045-1外	包蔵地・古墳群	077	芝ケ谷遺跡	江戸崎字芝ケ谷甲4344-11外	包蔵地	131	根古ヤ遺跡	上君山字根古ヤ2797外	包蔵地
024	椎塚貝塚	椎塚字中峯120外	貝塚	078	花指遺跡	月出里字花指272-9外	包蔵地	132	岡平遺跡	上君山字岡平2865外	包蔵地
025	大塚山古墳	駒塚字大塚420	古墳・塚	079	新畑塚	月出里字新畑387-1外	塚	133	和田遺跡	上君山字和田2326外	包蔵地
026	隠里の塚古墳	椎塚字台1747-1	古墳	080	権現遺跡	月出里字権現1226-1外	包蔵地	134	戸崎遺跡	上君山字戸崎2535-1	包蔵地
027	蓮沼貝塚	高田字蓮沼地内	貝塚	081	辺田平遺跡	蒲ケ山字辺田平297-1外	包蔵地	135	真福寺遺跡	高田字並木1431-1外	寺院跡・古墳
028	中根貝塚	高田字中根地内	貝塚	082	中部遺跡	蒲ケ山字辺田台238外	包蔵地・貝塚	136	高田大神古墳	高田字高田大神1348-1	古墳
029	駒塚貝塚	駒塚字戸上606外	包蔵地・貝塚	083	後谷遺跡	蒲ケ山字後谷927外	包蔵地	137	東条高田城跡	高田字古ヤ648-1外	城館跡
030	蒲ケ山貝塚	蒲ケ山字平628外	包蔵地	084	上ヲモ子塚	蒲ケ山字上ヲモ子1189-1	塚	138	馬場添遺跡	高田字馬場添525-1外	包蔵地
031	沼田貝塚	沼田字神田2077-6外	包蔵地・貝塚	085	原内遺跡	蒲ケ山字原内1172-2外	包蔵地	139	青宿遺跡	高田字青宿675外	包蔵地
032	二の宮貝塚	佐倉字二ノ宮2608-2外	集落・墓・貝塚	086	土戸平遺跡	蒲ケ山字土戸平1236-1外	包蔵地	140	青宿古墳	高田字青宿689	古墳
033	センゲン貝塚	佐倉字浅間	貝塚	087	赤羽根遺跡	沼田字赤羽根988-5外	包蔵地	141	天ノ宮遺跡	高田字天ノ宮1717外	包蔵地
034	高田岡貝塚	高田字大畑1525	貝塚	088	立通し遺跡	沼田字立通し2658-1外	包蔵地	142	中畑遺跡	椎塚字中畑861外	包蔵地
035	台畑貝塚	佐倉字佐倉原3065外	貝塚	089	二重堀遺跡	沼田字二重堀2624-2外	防塁	143	宮前遺跡	駒塚字宮前693外	包蔵地
036	駒塚台上遺跡	駒塚字並木520外	集落跡	090	赤羽根塚	沼田字赤羽根2537-1	塚	144	原平遺跡	椎塚字原平1041外	包蔵地
037	中峰遺跡	村田字中峰甲3901外	包蔵地·古墳群·城館跡	091	原久保遺跡	沼田字原久保774外	包蔵地	145	中峯大日塚	椎塚字中峯106	塚
038	大日古墳	羽賀字大日1411-2	古墳	092	時崎平遺跡	時崎字平845外	包蔵地·貝塚?	146	椎塚台遺跡	椎塚字台1747-1外	包蔵地
039	羽賀城跡	羽賀字根小屋1102-2外	城館跡	093	宮後遺跡	時崎字宮後707外	包蔵地	147	椎塚城跡	椎塚字台1743-1外	城館跡
040	中城古墳	羽賀字中城1568	古墳	094	沼田庚申塚	沼田字庚申塚2398-1	塚	148	椎塚荒久遺跡	椎塚字荒久1677外	包蔵地
041	大日峯古墳	松山字大日峯2772	古墳	095	神明平遺跡	時崎字神明平75外	包蔵地	149	薬師後遺跡	椎塚字薬師後1469外	包蔵地
042	山王古墳	下君山字山王3305-1	古墳	096	塚本遺跡	沼田字塚本1040-1外	包蔵地・古墳群	150	奥山遺跡	駒塚字奥山943外	包蔵地
043	大塚古墳	上君山字大塚2409	古墳	097	中道遺跡	沼田字中道1253外	包蔵地	151	代遺跡	駒塚字代908外	包蔵地
044	沼口古墳群	上君山字沼口3492外	古墳群	098	沼田遺跡	沼田字寺台1361-2外	城館跡	152	駒塚荒久遺跡	駒塚字荒久448外	包蔵地
045	栗山遺跡	小羽賀字栗山581-4外	包蔵地・古墳群	099	亀台古墳群	沼田字亀台1478-1外	古墳群	153	原屋敷遺跡	駒塚字原屋敷1091外	包蔵地
046	土戸古墳	時崎字土戸255-1	古墳・集落	100	柿作台遺跡	沼田字柿作台1644-1外	包蔵地・貝塚	154	原山遺跡	駒塚字原山1121外	包蔵地
047	東前古墳群	時崎字東前619外	古墳群	100	辺田後遺跡	沼田字辺田後1624外	包蔵地	155	天王台遺跡	駒塚字天王台1571外	包蔵地
048	辺田台古墳	蒲ケ山字辺田台257-2	古墳	102	御城遺跡	高田字御城2790外	城館跡	156	台坪遺跡	桑山字台坪285-1外	包蔵地
049	長塚古墳	佐倉字長塚326	古墳	102	古橋塚	江戸崎字古橋乙1528	塚	157	上ノ台北遺跡	桑山字上ノ台300-1外	包蔵地
050	延 塚百頃 姫宮古墳群	佐倉字迎坪1801-2外	古墳群	103	狸崎北遺跡	江戸崎字狸崎3826外	包蔵地	158	上ノ台遺跡	桑山字上ノ台295外	包蔵地
			集落・塚	104	狸崎遺跡	江戸崎字狸崎505外	包蔵地・貝塚	159	台坪古墳群	桑山字台坪337	古墳群
051	大日山古墳群	古渡字大日山1908外 桑山字上 / 台306-2州		-		江戸崎字原乙568	塚?	160	清水古墳群	桑山字白旗谷97外	包蔵地・古墳郡
052	桑山古墳群	桑山字上ノ台306-2外	古墳群	106	原大日遺跡		包蔵地・貝塚		山崎古墳群	蒲ケ山字山崎174-1外	古墳群
053	思川遺跡	佐倉字思川2662外	集落跡	107	原南遺跡	江戸崎字原乙562-2外	也似地・只塚	161	山門白墳矸	(用7 川十川町1/4-17)	口付付

Ⅲ 歴史的環境

江戸崎町の遺跡

遺跡の所在する江戸崎町は、茨城県の南部に広がる、縄文期の海進海退や小河川の開析により形造られた、標高20m 前後の稲敷台地が大部分を占める。調査が行われた楯の台古墳群は、第1図からも窺われるように小野川に面した台地上に位置する遺跡で、周辺には、縄文時代から中世に至る様々な遺跡が展開し、原始から人々の生活には適した場所であったことを物語っている。

本項では、楯の台古墳群の立地や概要については次項に譲ることとし、ここでは、周辺の遺跡を中心として、江戸崎町の遺跡を時代毎に概観してみたい。

第1図と第1表は、平成10・11年度に実施された埋蔵文化財包蔵地分布調査と、新規発見の遺跡を加えた、 現在周知されている遺跡の位置とその詳細で、町内には、161ケ所の遺跡が存在する。

縄文時代において、町の周辺地域には、土器形式の標識遺跡となった学史に残る遺跡が点在しているが、これらは、貝塚遺跡が多数を占め、町内においても高田地区の駒塚・椎塚、佐倉地区の南平・山中・小松川や、明神、村田、更に蒲ケ山などの貝塚が知られる。楯の台古墳群においては、縄文早期末の炉穴が検出されており、周辺部の踏査でも該期の遺物が採取され、また、本遺跡の北方に位置する中佐倉貝塚ではこの時期の炉穴を調査しているなど、人々の痕跡を遺構として遡ることができる。

弥生時代では、昭和59年に実施された楯の台古墳群第1次調査において、7号墳の下から検出された後期の住居跡が本時期における遺構の初見となっている。これ以来、大日山古墳群、思川遺跡、秋平遺跡の発掘調査により遺構は確認されているが、これまでの発掘調査は、町の全域を網羅する形で実施されたものではなく、本遺跡周辺に偏在しているため断定はできないものの、数少ない調査事例と分布調査の成果を併せ考えると、町内では、北部の霞ヶ浦や小野川を臨む台地上に弥生時代の遺跡は展開するようである。

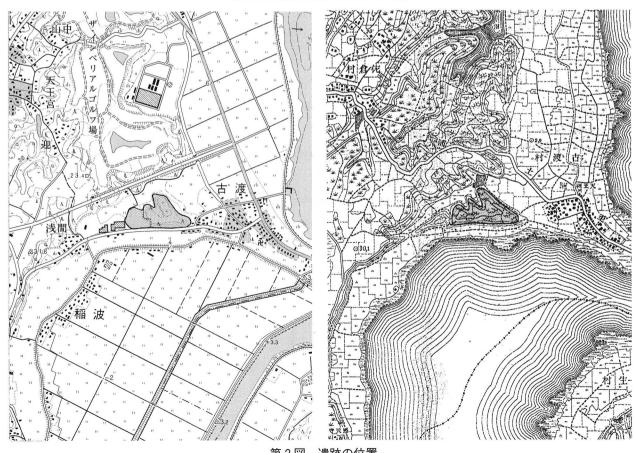
古墳時代のうち墓域は、全体で16古墳群、83基の古墳が確認されている。規模などについては、平成12年度刊行の『姫宮古墳群1・2号墳 水神峯古墳』の報告書に新規発見の山崎古墳群を除いた詳細が記載してあるが、これらの古墳は、主に円墳で構成され、前方後円墳も全長53mを測る東前古墳群1号墳を最大とし11基を数える。古墳は、町全域に分布してはいるものの、概して、小野川やその他小河川の水系を臨む台地縁辺部に立地する傾向を示す。集落については、町全体に分布すると推定されるが、発掘調査が行われているのは、本遺跡周辺の台地上のみである。

律令期に至ると町内には、信太郡の郡衙が置かれており、小野川を遡った下君山の台地上が有力視されている。この台地上には、瓦が散布し、塔心礎が遺存する郡寺と目される下君山廃寺が位置する。周辺の台地上からは、墨書土器を含む多量の遺物が表採され、それらの量から察すると、大規模集落の存在が示唆される。また、従来遺跡の埋蔵が確認されなかった台地麓部の微高地上にも遺物の散布が認められ、遺跡の埋蔵が台地上にとどまることなく広がることを示している。

中世においては、10ケ所で城館跡が確認される。詳細な調査が実施されていないため機能時期については、不明と言わざるをえないが、現在残る遺構からは中世末の築城技術が読みとれる。楯の台古墳群においても城館に伴う遺構が確認されており、南北朝期の史料に登場する佐倉楯は、北西1.5km に位置する城の内遺跡と推定され、本遺跡との関連が指摘される。更に、本遺跡の東で台地下の古渡地区は、史料により頼朝河岸と呼ばれる河岸の比定地にあたり、中世の陶器片が表採されている。また、小野川対岸の古渡地区は、近世初頭において丹羽長重が陣屋を構えた地であり、この地域が交通の要衝であったことが窺われる。



楯の台古墳群全景(1965年空撮)



第2図 遺跡の位置 左図 国土地理院作製2.5万分の1『江戸崎』 右図 明治14年測量迅速図『江戸崎村』を2.5万分の1に縮小

楯の台古墳群の概要

楯の台古墳群は、江戸崎町の北部、古渡地区と佐倉地区にまたがる台地上に位置する。この台地は、現在では土砂採取により大部分が消滅しているが、第2図や1965年に国土地理院が撮影した航空写真からは、大きな島状の独立した台地であることが判る。今日においては、小野川の流域は、干拓事業が進み肥沃な耕地となっているものの、旧状は霞ヶ浦に注ぎ込む河口付近にあたり、川幅も広くあたかも霞ヶ浦の内湾を呈していた。遺跡は、これらを眼下に納める台地上に存在する。

楯の台古墳群は、遺跡名が表すように周知の古墳群であるが、弥生時代から律令期へかけての集落跡、更には、中世の城館跡が一つの台地上に複合する遺跡である。このため、遺跡名を楯の台遺跡として扱っているものも見受けられるが、今回の調査では町遺跡台帳に従い古墳群の名称を用いた。

本台地における調査は今回で3次目を数える。第1次調査は、昭和59年に楯の台古墳群発掘調査会により、 古墳4基と集落の調査が実施されている。以下、これらの概要を古墳・集落・城館に分けて概観したい。

古墳群は、合計 8 基から構成され、その規模については下表に記しているが、調査の結果 6 基が湮滅することとなった。古墳群の内訳は、前方後円墳 3 基 ? (内帆立貝式古墳に近いもの1 基)、帆立貝式古墳 1 基、円墳 3 基、方墳 1 基である。分布状況に関しては、第 3 図に示した通りで、概ね小野川の流域を視野に入れる台地縁辺部に位置し、遺跡の北 1 km には、6世紀前半に比定される馬具が出土した水神峯古墳、西700m には、6 基の古墳から構成される佐倉原古墳群が存在する。第 1 次調査において発掘されたのは、4~7号墳で、報告書においては、4号墳(円墳)が最も古く、次で 7・5・6号墳の順となり、築造年代については、4号墳が主体部に粘土郭を用いていながらも、後期鬼高 I 類の住居跡を壊して築造されているためこれに近接する時期とし、他は、掲載された出土遺物により6世紀以降の年代を与えている。なお、8号墳は、他の前方後円墳が主軸を東西方向にとるのに対して、その主軸は南北方向と異り、更に、位置的には城館に伴う空堀の堀底道を押さえる場所にあたることから、櫓台とそれに連なる土塁の可能性が高いと判断される。しかし、古墳を利用していることも考えられるため、疑問符を付けて扱った。

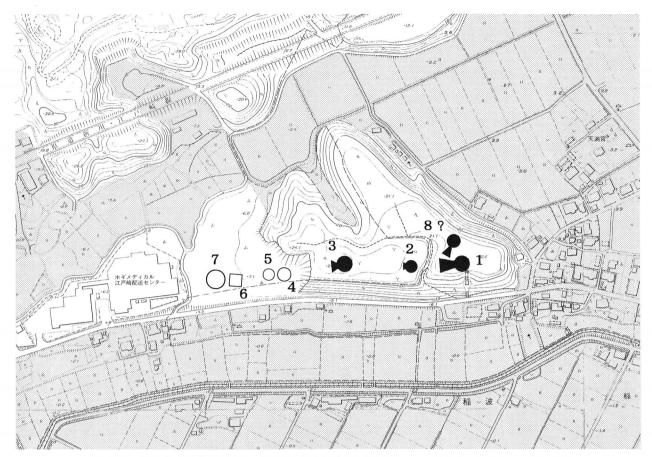
集落は、縄文時代において、住居の検出には至っていないものの、早期(田戸下層・上層式、野島式、茅山式)、前期(諸磯式)、中期(阿玉台式、加曽利E式)の資料が得られている。住居が認められるのは、弥生時代後期においての2軒であり、続いて古墳時代中期2軒と後期3軒である。また、弥生土器は、付加条縄文を地文とする土器が大多数を占めるが、極少量の三角文を施文する南関東系の土器を報告している。

城館については、第1次調査の報告書中において、楯ノ台の地名について考察しているものの、中世の資料は得られておらず、今回の調査においてその一端が明らかとなっている。

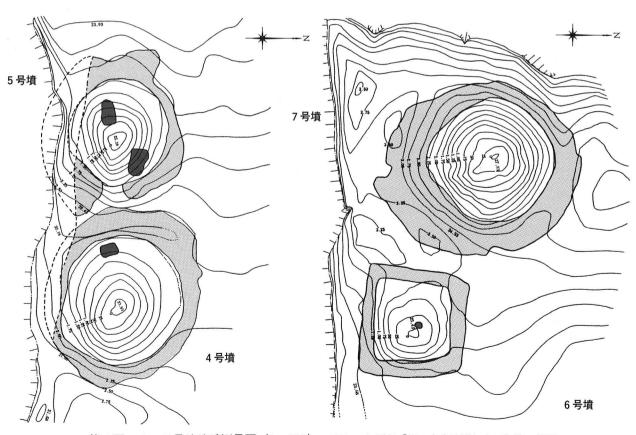
第2表 楯の台古墳群一覧表

番	号	1 号 墳	2 号 墳	3 号 墳	4 号 墳	5 号 墳	6 号 墳	7 号 墳	8 号 墳
形	態	前方後円墳	帆立貝式古墳	前方後円墳	円 墳	円 墳	方 墳	円墳	前方後円墳?
規	模	後円部幅 23	全 長 19.0 後円部幅 16.5 後円部高 1.2	後円部幅 18.0	南 北 19.0	南 北 16.0	南 北 12.0	1	全 長 30 後円部幅 19 後円部高 3.0
備	考	稲荷神社北側	施の第2次調		施の第1次調	施の第1次調	施の第1次調	昭和59年度実 施の第1次調 査により湮滅	

(単位m)



第3図 楯の台古墳群分布図 江戸崎町都市計画図2.5千分の1を5千分の1に縮小。白抜は湮滅



第4図 4~7号墳墳丘測量図(1:600) 昭和61年刊行『楯の台古墳群』より加筆・転写



楯の台古墳群 遠景(南より)



2号墳 調査前現況(北西より)



3号墳 調査前現況(北東より)



4号墳 調査状況(北西より)



5号墳 調査状況(北西より)



6号墳 調査状況(東より)



7号墳 調査状況(東より)



8号墳 現況(南西より)

第3表 遺構一覧表

第2次調査(古墳)

遺構番号	形 態	計 測 値 出土遺物
2号墳	帆立貝式	全長19.0m、後円部幅16.5m、高1.2m、主体部長辺2.4m、短辺0.8m、土師器:高坏、須恵器:蓋・壷
		深さ0.5m、主軸方向:N-85°-W
3 号墳	前方後円	全長26.0m、後円部幅18.0m、高1.0m、主体部長辺2.5m、短辺1.1m、土師器:高坏、須恵器:坏・蓋・高坏・平瓶、
		深さ0.54m、主軸方向:N - 86°-E

第2次調査(住居跡)

遺構番号	規 模(m) 東西×南北 🌣		平面形態	主軸方向	主柱穴	貯蔵穴	その他	時	期	出 土 遺 物	
1号住居跡	5.4 ×1.9 0).31						不	明	3号墳に壊される。	
2 号住居跡	0.60×2.45 0).13						不	明	3号墳に壊される。	
3 号住居跡	3.8 ×2.18 0).12	隅丸方形?				炉	弥生	後	壷1。3号墳に壊される。	

第2次調査(土坑)

遺構番号	規模 長軸×短軸 深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期	遺構番号	規模	長軸×短軸	深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期
1号土坑	1.27×0.70 0.20	不整形	N-47°-E	不明	3 号土坑	2.07×	1.4 0.17		楕円形	N-77°-W	不明
2 号土坑	1.3×0.98 0.15	不整形	N-50°-E	不明							

第3次調査(住居跡)

遺構番号	規 模(m)	平面形態	主軸方向	主柱穴	貯蔵穴	その他	時 期		出土遺物
	東西×南北 深さ								
1号住居跡	$6.5 \times 6.5 0.60$	正方形	N-70°-W	4	有り	西竃	6 C初		5 ・高坏 2 ・甕 4 、
									玉、石製品:紡錘車
2 号住居跡	$3.9 \times 3.3 0.30$	隅丸方形	N-40°-W	なし	なし	北竃	9 C後		4・甕1、須恵器:坏1・皿1、
									E、石製品:紡錘車
								鉄製品:鎌	・鋤先・刀子・斧・鏃・直刀・
								釘・鉸具?	・火打金
3 号住居跡	$4.3 \times 6.5 0.50$	隅丸方形	N - 0 °	4	なし	炉	弥生後	壷 1	
4 号住居跡	$6.0 \times 6.0 0.55$	正方形	N-50-E°	4	有り	西竃	6 C 初	土師器:高5	不1、須恵器:坏1
5 号住居跡	6.0 ×4.3 0.20	長方形	N-67°-E	不明	不明	炉	5 C 後	土師器:坏	5・甕1、土製品:土玉
6 号住居跡	4.3 ×5.4 0.30	長方形	N-33°-W	4	なし	炉	古墳前	土師器:甕	3 · 坩 2
7 号住居跡	4.8 ×5.8 0.35	隅丸方形	N-30°-W	4	なし	炉	弥生後	壷 1	
8 号住居跡	$5.7 \times 5.9 0.40$	正方形	N-63°-E	4	有り	炉	5 C 後	土師器: 颹、	石製品:紡錘車
9 号住居跡	6.6 × 6.6 0.40	正方形	N-55°-W	4	有り -	西竃	6 C 初	土師器:坏1	12·小型甕 2 ·甕 5 ·高坏 2 ,
								土製品:土	玉·管状土錘、石製品:砥石
10号住居跡	5.7 ×5.7 0.40	正方形	N-60°-E	4	有り	東竃	5 C末	土師器:坏	5・高坏1・甕1・甑2、土玉
11号住居跡	4.0 ×6.7 0.25	隅丸方形	N-30°-W	6	なし	炉	弥生後	壷 1	
12号住居跡	4.3 ×4.6 0.50	正方形	N-10°-W	4	有り	北竃	6 C 初	土師器:坏	7・甕2・甑1、土製品:土玉
13号住居跡	8.2 ×7.7 0.50	正方形	N-18°-W	4	有り	北竃	6 C初	土師器:坏	3・高坏3・小型甕2・甕4、
								須恵器:坏	1・高坏1、土製品:土玉
14号住居跡	3.9 ×4.5 0.04	方 形?		4		炉	古墳前期]?]	10号住居跡と重複し本跡が古い
15号住居跡	1.5 ×4.6 0.14	方 形?		不明	不明		10号住屋	計 計	10号住居跡と重複し本跡が古い
16号住居跡	3.45×1.5 0.15	隅丸方形?		不明	不明		弥生後期	後半以前	17号住居跡と重複し本跡が古い

第3次調査 (土坑・炉穴)

遺構番号	規模 長軸×短軸 深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期	遺構番号	規模 長軸×短軸 深さ(m)	平面形態	主軸方位	時期
1号土坑	1.2×0.6 0.17	長楕円形	N-7°-E	不明	9 号土坑	直径1.1 0.38	円形	N - 0°	不明
2 号土坑	1.4×1.0 0.34	楕円形	N-13°-W	不明	10号土坑	1.1×1.0 0.22	円形	N - 0°	不明
3 号土坑	3号炉穴と同一	_	_		11号土坑	直径1.2 0.15	円形	N-0°	縄文
4 号土坑	直径0.7 0.36	円形	N-0°	6 C初	1号炉穴	1.7×1.0 0.1	楕円形	N-55°-W	縄文早末
5 号土坑	直径1.3 0.3	円形	N-0°	不明	2 号炉穴	0.9×0.7	楕円形	N-15°-W	縄文早末
6 号土坑	1.1×0.9 0.32	楕円形	N-23°-W	不明	3 号炉穴	1.3×1.1 0.25	楕円形	N-26°-W	縄文早末
7 号土坑	直径0.7 0.24	円形	N - 0 °	不明	4 号炉穴	直径0.6 0.3	円形	N - 0°	縄文早末
8 号土坑	直径0.7 0.16	円形	N - 0°	不明	5 号炉穴	不明			縄文早末

Ⅳ 検出された遺構と遺物

遺構と遺物の概要

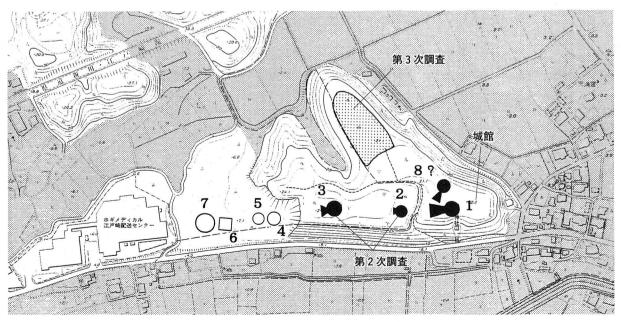
調査は下図に示した通り、東西に広がりを持つ台地の東部分を対象として実施され、小野川を臨む南部に 古代の墓域、北の舌状に張り出す台地上に生活域、東端に中世の城館が確認されている。

第2次調査においては、2・3号の帆立貝式と前方後円の2基の古墳を主な対象としたが、弥生時代と時期不明の住居跡を3軒検出し、集落の一部を調査している。本格的な集落の調査は、古墳の北側において実施された第3次調査で、弥生時代後期、古墳時代、平安時代、時期不明の住居跡16軒が検出された。

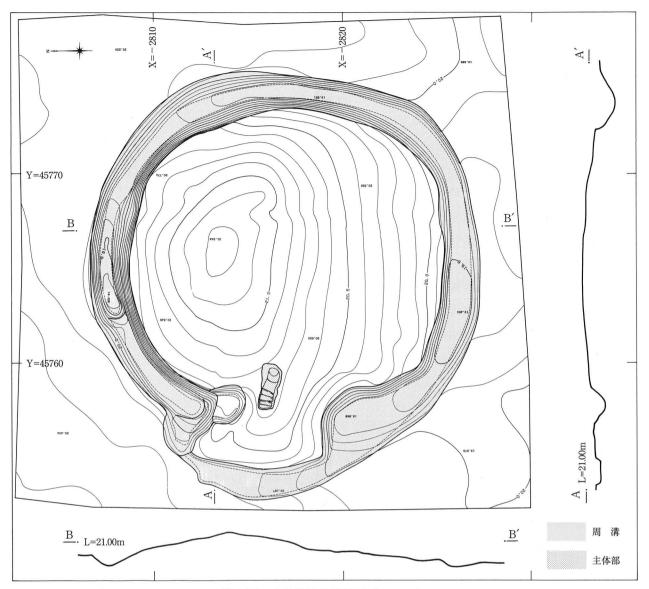
出土遺物においては、縄文早期末の条痕文系土器が数量的には多数を占め、次いで中期前半の阿玉台式の 資料が古く、その後、弥生時代後期以降住居に伴う遺物が見られる。これらについては、代表的な器形を図 示し、器種構成を示すため集合写真で提示し、個体数を左表中に記録した。器形についての分類は、本遺跡 の北に位置する大規模集落が調査された秋平・池平遺跡の報告書中の分類を踏襲している。

集落内において出土した須恵器は、坏身・蓋・高坏・壷などで、TK208あるいはTK23と、TK47の製品が確認され、各遺構の時期を判断するための基準とした。また、各遺構からは、球状や管状の土錘が出土しており、漁撈活動が活発であったことが推測され、霞ヶ浦へ注ぎ込む小野川の河口付近に位置する遺跡の立地を如実に示している。更に、平安時代、9世紀後半に位置付けられる2号住居跡からは、鋤先・鎌などの農具に混じり釘・斧・刀子・火打金・鏃・直刀・鉸具?などの鉄製品が出土している。特に鏃・直刀・鉸具?などは、古墳における副葬品の可能性が考えられ、周辺地域には古墳が数多く分布することから、これら周辺の古墳からもたらされたものかもしれない。

一方、古墳における出土遺物は、周溝内によるものが大多数を占め、特に3号墳からは湖西産の須恵器(高坏・平瓶)が出土している。主体部は、いずれも箱式石棺と考えられる形態で、2号墳は、3号墳と比べ遺存状態は良いものの須恵器片(蓋)1点が出土しているに過ぎない。これに対し3号墳の主体部からは、琥珀及びガラス・水晶などを素材とした棗玉・管玉・丸玉・小玉の玉類が出土している。



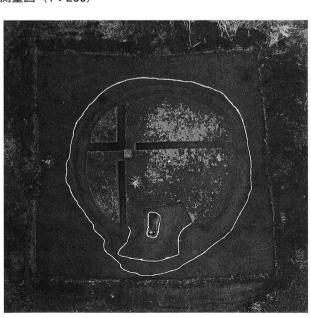
第5図 調査区設定図(1:5,000)



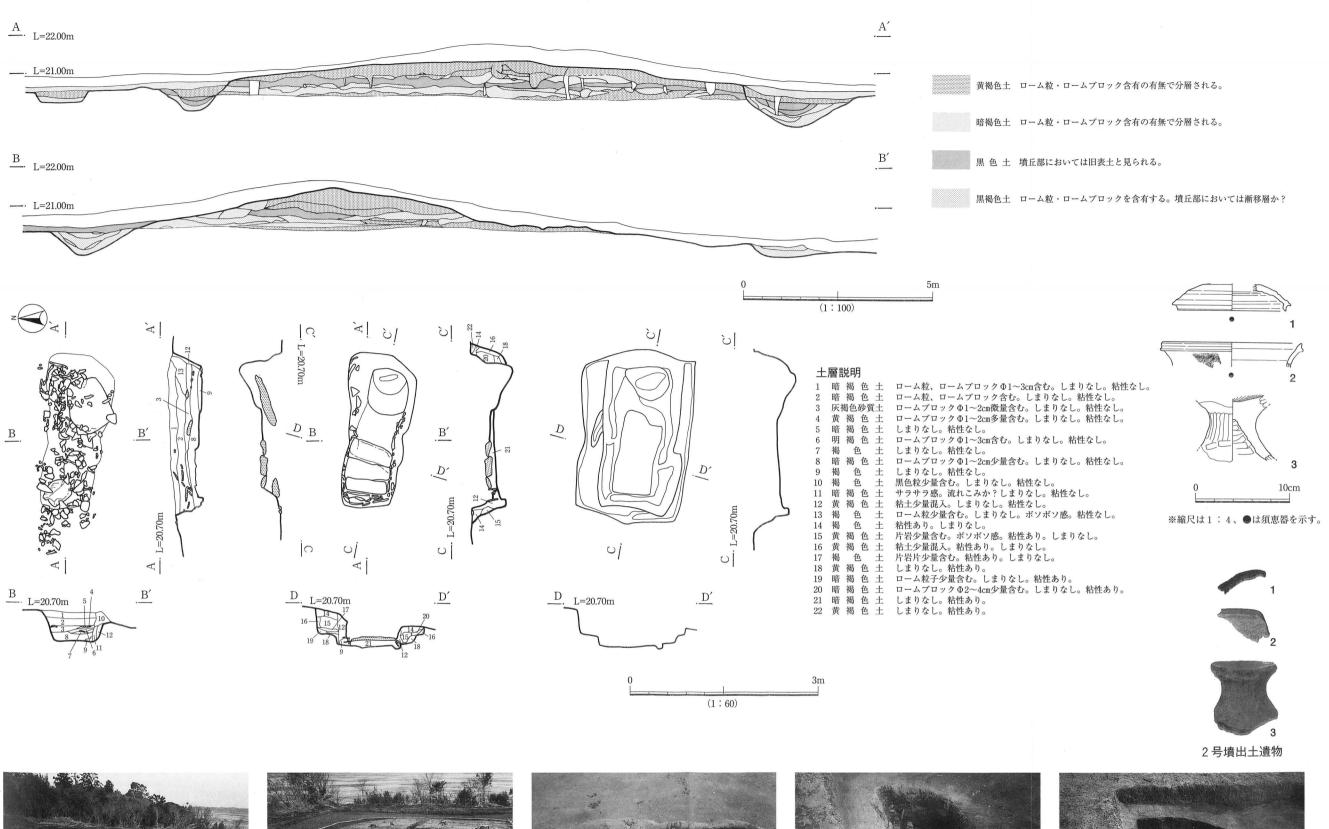
第6図 2号墳墳丘測量図(1:200)



2・3号墳全景(北東より)



2号墳全景(空撮)





2号墳全景(西より)



同 後円部周溝構築状況(北より)



同 主体部検出状況(北より)



同 主体部構築状況(西より)



同 主体部掘り方(西より)

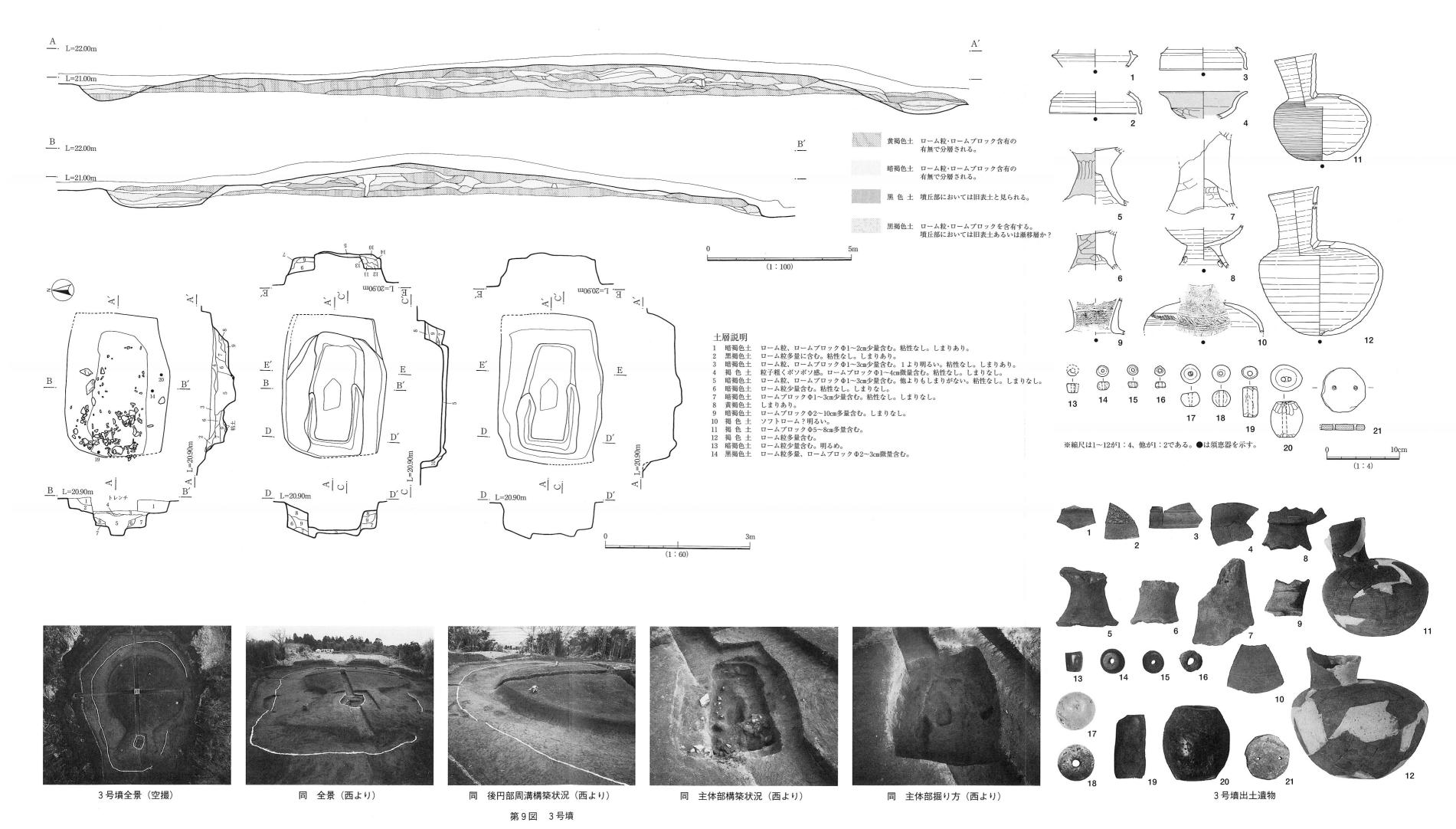
古墳

2号墳 帆立貝式古墳で、遺跡の立地する台地のやや東部分に位置し、南に小野川を臨む縁辺部に立地す る。地勢はほぼ平坦で、基底面の標高は20m 前後を測り、現況は東西20m、南北13.5m、高さ0.80m である。 1号墳とは約30mの距離を隔てて西に位置し、現況は篠竹・低木が生い茂る荒れ地で、墳丘の上部は削平 を受けていると判断されるが、平面的には、築造当時の原形を保っている。平面形態は、前方部が短く北側 の側面は括れ部からやや開き、後円部は部分的に凹凸があるものの正円を呈する。調査の結果、墳丘の規模 は、全長19.0m で、周溝を含み22.5m、前方部長4.0m、幅6.5m、後円部幅16.5m、墳丘の残存高は、前方 部0.40m、後円部1.2m を計測する。主軸方向は、N-85°-W である。墳丘の構築状況を表したのが第7図で、 含有物及びその量により分層された黄褐色土・暗褐色土・黒色土・黒褐色土をスクリントーンで図示した。 このうちの黒色土が旧表土と推定され、その上に版築状の黄褐色土が確認される。周溝は全周しブリッチは 認められない。幅は多少の変化はあるものの括れ部が最大となる他は1.7~2.7m、深さ0.4~1.0m を計測す る。括れ部は幅3.5m、深さ0.5m である。主体部は、括れ部上に構築され、雲母片岩を組み合わせた箱式石 棺を土坑中に埋設したものである。石棺の主軸は N-75°-W を示し、墳丘の主軸とは微妙にずれる。石棺は、 雲母片岩を用いて構築され、調査時においては蓋石1枚が棺内に崩落し、側石は抜き取られた状態で、底石 3枚が辛うじて遺存していた。底石は検出されているものと同様であるとすれば7枚程と推測される。棺の 推定計測値は、長辺2.4m、短辺0.8m、深さ0.5mである。なお、棺と土坑との間には黄褐色土を主体とし た裏込が行われている。土坑掘り方は長辺2.7m、短辺1.7m、深さ0.65m である。遺物は、図版番号 1 の須 恵器の蓋が主体部から出土し、7世紀の前半に比定されることから、この時期に築造されたものと判断され る。2・3については、6世紀代の遺物であるが、後円部東の周溝内出土のため提示した。

3号墳 前方後円墳で、2号墳と同様の地形上に立地し、2号墳とは約80mの距離を隔てて西に位置す る。現況は篠竹・低木が生い茂る荒れ地であり、墳丘の上部は大きく削平を受けていると判断されるが、平 面的には、良好な保存状態を示す。現況規模は東西16m、南北10m、高さ0.50m である。平面形態は、括れ 部がしっかりと構築され、前方部が短くハの字状に開き、後円部は歪でいるもののほぼ正円を呈する。調査 の結果、墳丘の規模は、全長26.0m で、周溝を含み30.0m、前方部長7.5m、最大幅10.0m、後円部幅 18.0m、墳丘の残存高は、前方部0.35m、後円部1.0m を計測する。主軸方向は、N-86°-E である。第9図 は、墳丘の構築状況を把握するため墳丘に対し、東西南北を基準に設定した土層観察用ベルトの結果を、土 質毎にまとめスクリントーンで表したものである。このうちの黒色土及び黒褐色土が旧表土と推定され、そ の上に版築状の黄褐色土が確認される。周溝は、前方部南西角がブリッチとなり、南部分については、台地 縁辺部側であることに起因すると見られ、明瞭な掘り込みは確認されていない。幅は括れ部が最大となり 0.58m、最狭は前方部先端で0.18m である。深さは0.40~0.70m を計測する。主体部は、前方部の後円部 側に偏在して構築され、雲母片岩の散布が確認されることにより、箱式石棺を土坑中に埋設したと推測され る。掘り方の主軸は N-82°-W を示し、墳丘とは微妙にずれる。石棺の石材はすべて抜き取られており、土 層断面及び掘り方の形状から棺の推定計測値は、長辺2.5m、短辺1.1m、深さ0.54m である。棺と土坑との 間には黄褐色土・暗褐色土・褐色土を主体とした裏込が行われている。掘り方の計測値は、長辺3.0m、短 辺1.82m、深さ0.64m である。遺物は、図版番号13~20の玉が主体部から、また、8~12の須恵器が北側括 れ部の周溝内から出土し、湖西産の須恵器より7世紀初頭の年代が与えられ、検出された主体部の構築時期 と判断される。一方、後円部の周溝内と括れ部より1~6の6世紀前半の遺物が出土している。



第8図 3号墳墳丘測量図(1:200)



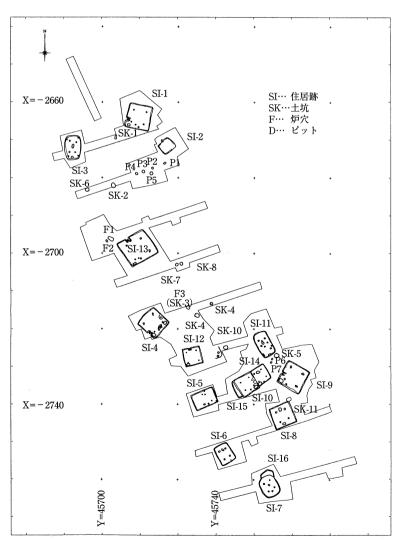
集落

第2次調査において、3号墳築造時に壊された弥生時代後期と、時期不明の住居が3軒検出されているが、いずれもその構造を把握できるものではなく、集落の本格的な調査は、古墳群の北側において実施された第3次調査においてである。3次調査において確認された16軒の住居のうち、明確に時期を判断できるものは、弥生時代後期が3軒(3・7・11号)、古墳時代前期が1軒(6号)、5世紀後半が2軒(5・8号)、6世紀初頭が6軒(1・4・9・10・12・13号)、9世紀後半が1軒(2号)で、6世紀初頭に盛期を持つことが明らかとなっている。資料の提示にあたっては、上記の区分に従って古いものより順に左頁に遺構、右頁にその出土遺物を図示した。

各時期における住居の形態を概観すると、弥生時代には、平面形が概ね長楕円形で、中央部に炉を伴っている。これらの住居跡は、付加条1種を施文した土器の出土及びその器形から後期と判断される。

続く古墳時代前期の所産である6号住居跡は、隅角に丸味を持った長方形で、北側に炉が付設され、5世紀後半には平面形態は方形となり、炉の付設位置は主柱穴間に挟まれた壁際に偏在する。

電への移行が確認されるのは、6世紀初頭においてであり、平面形態はほぼ正方形で、硬化面の状況及び 小ピットの検出により出入り口が想定される。電の位置については、出入り口の左右に中軸線よりはずれた

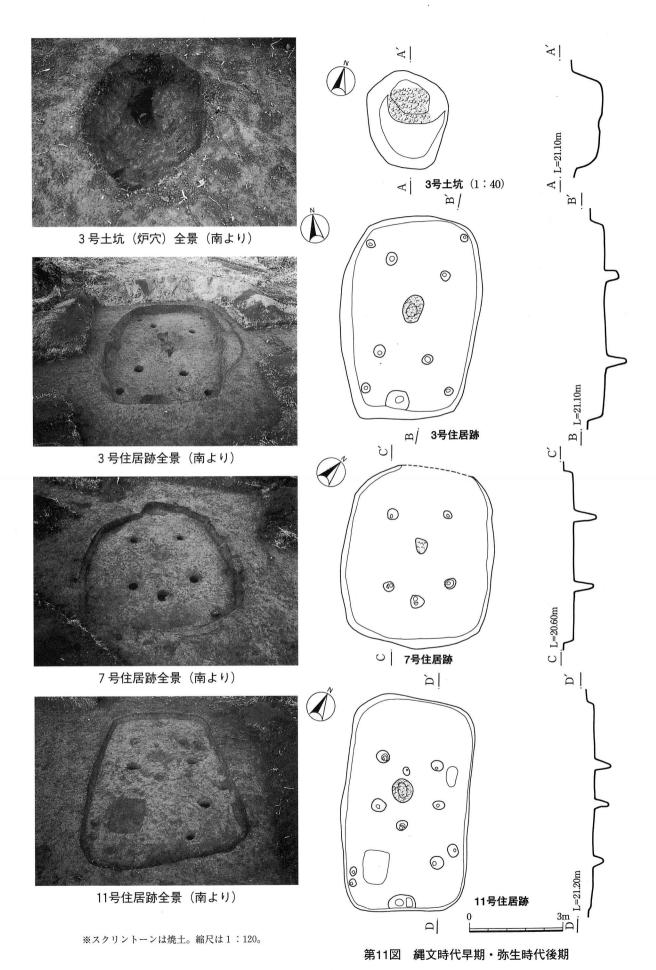


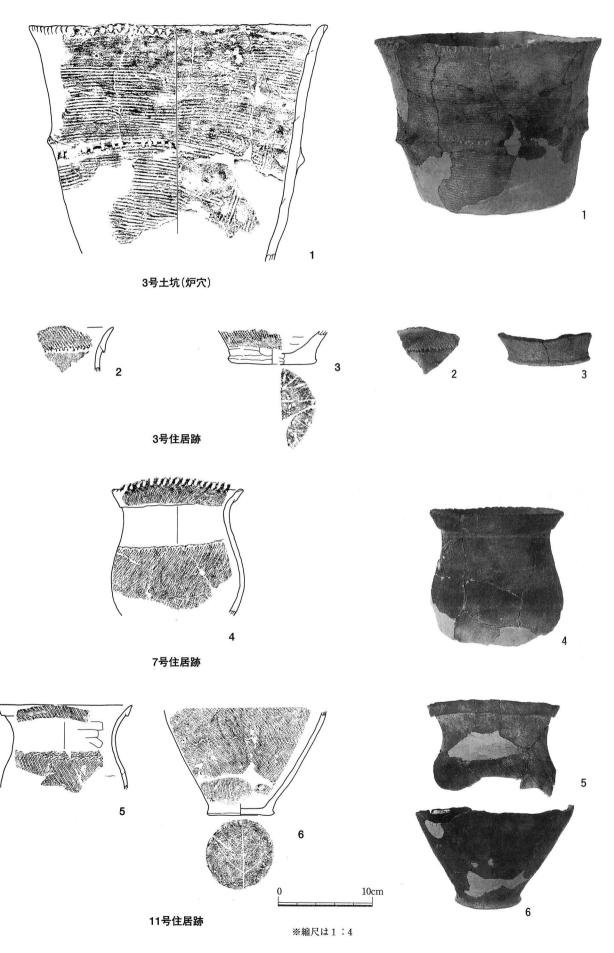
第10図 第3次調査(集落)全体図(1:1,000)

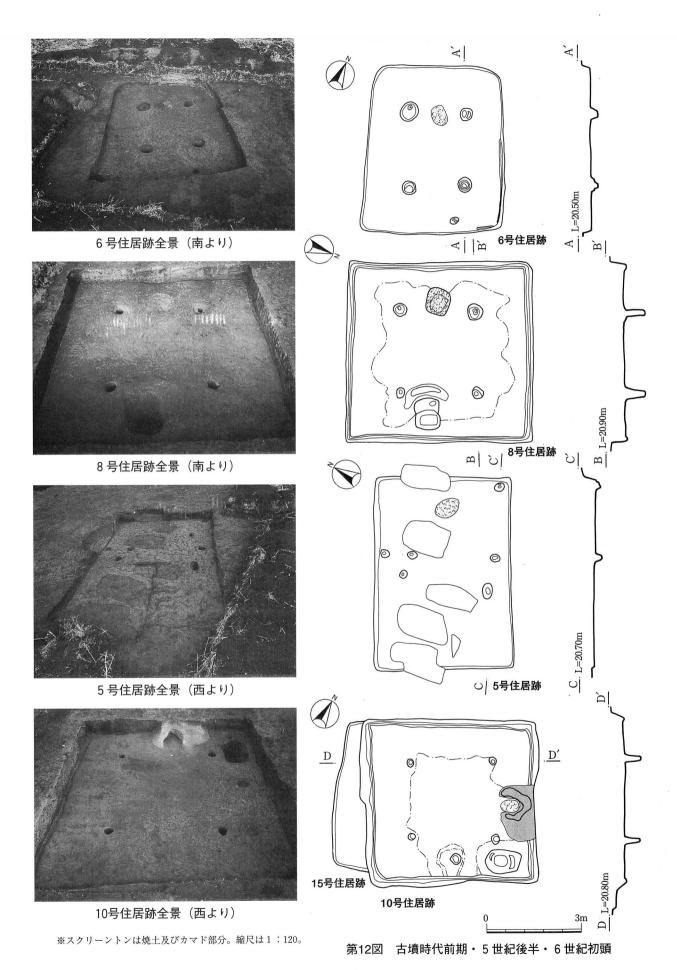
片側に偏って付設されているものと、出入り口の対面に位置するものとに分類される。貯蔵穴についても前者の場合竈が偏在した結果、面積が小さくなった住居内角に付設され、後者の場合は、竃の対面の住居隅に位置するなど、構造上に企画性が読み取れる。

これらの図示にあたって、出 入り口が想定されるものについ ては、出入り口を正面において 掲載し、その他については、主 軸線を基準に用いた。

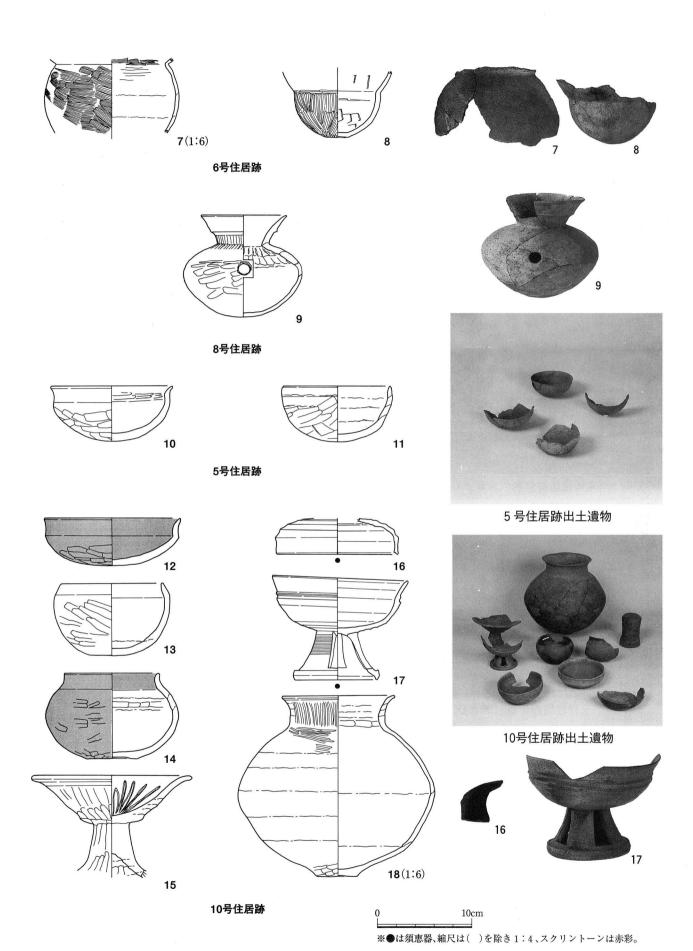
また、終焉を迎えるのは9世紀後半の住居で、2号住居の1軒のみの検出となり、平面形態は、ほぼ正方形であるが小型化する。なお、この住居の竃付設壁の外側には張り出し状に薄い黒色土の堆積が捉えられ、棚状施設の存在が示唆される。







— 22 —

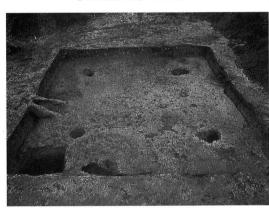




1号住居跡全景(東より)



4号住居跡全景(北東より)

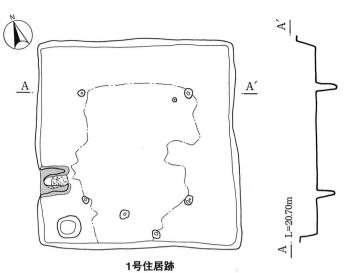


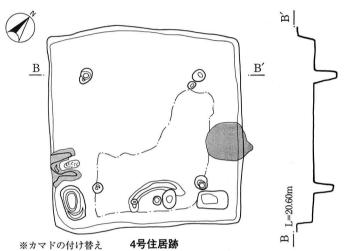
9号住居跡全景(南より)

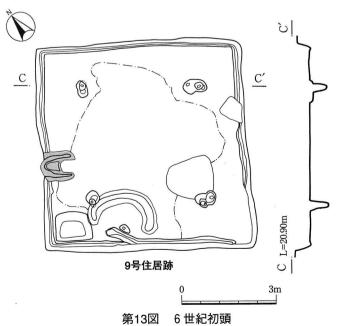


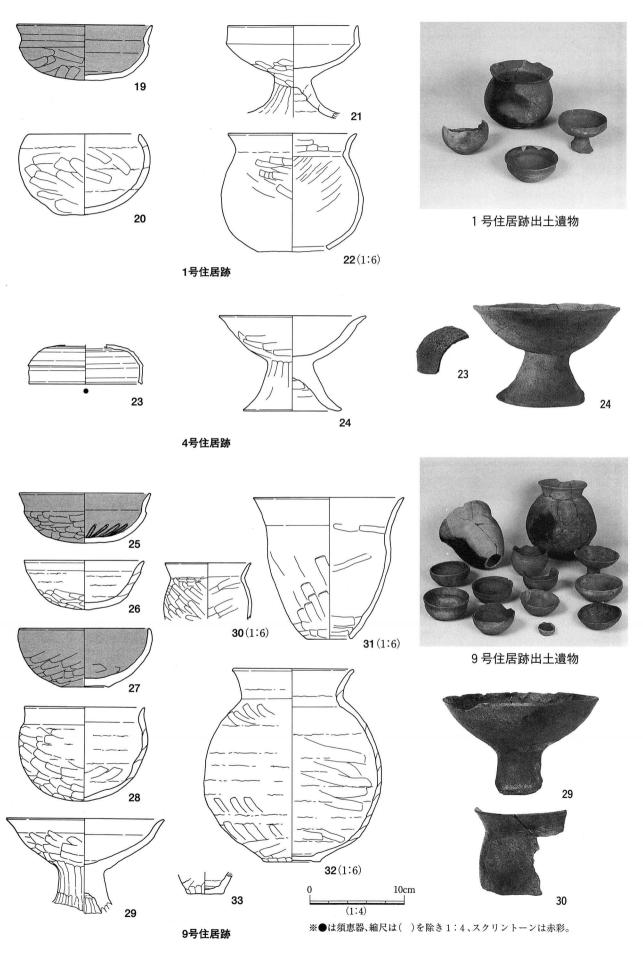
同 遺物出土状況(西より)

※スクリントーンは焼土及びカマド部分。縮尺は1:120。



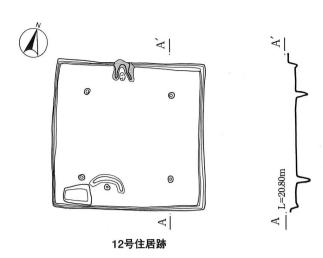




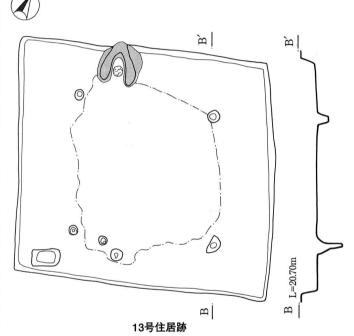




12号住居跡全景(南から)



13号住居跡全景(南から)

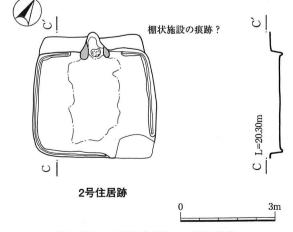




同遺物出土近景(西から)

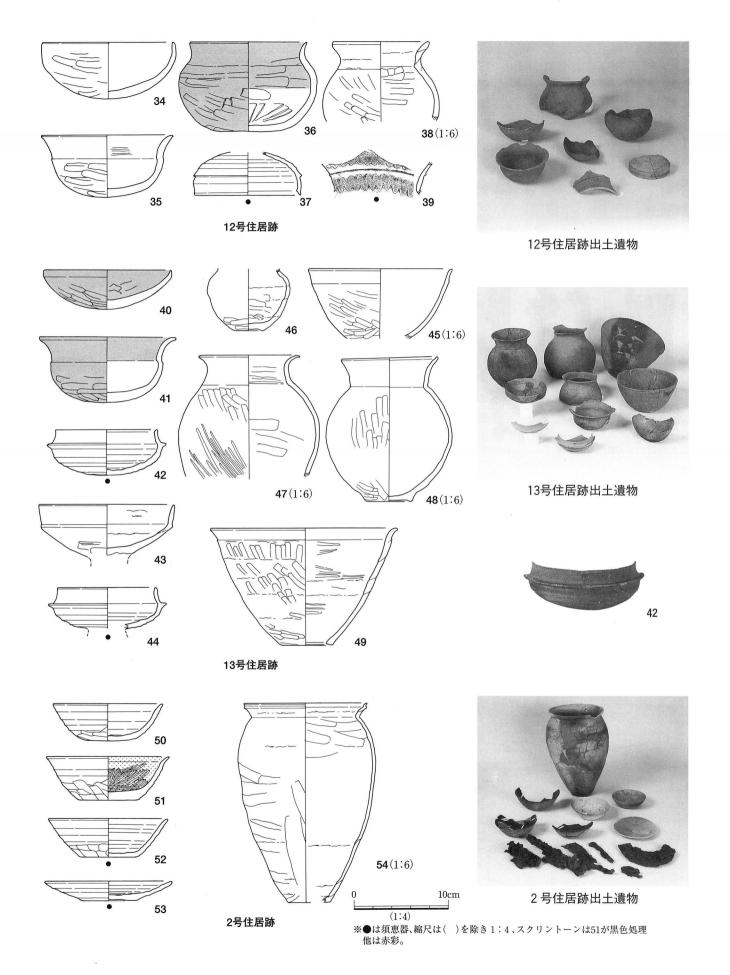


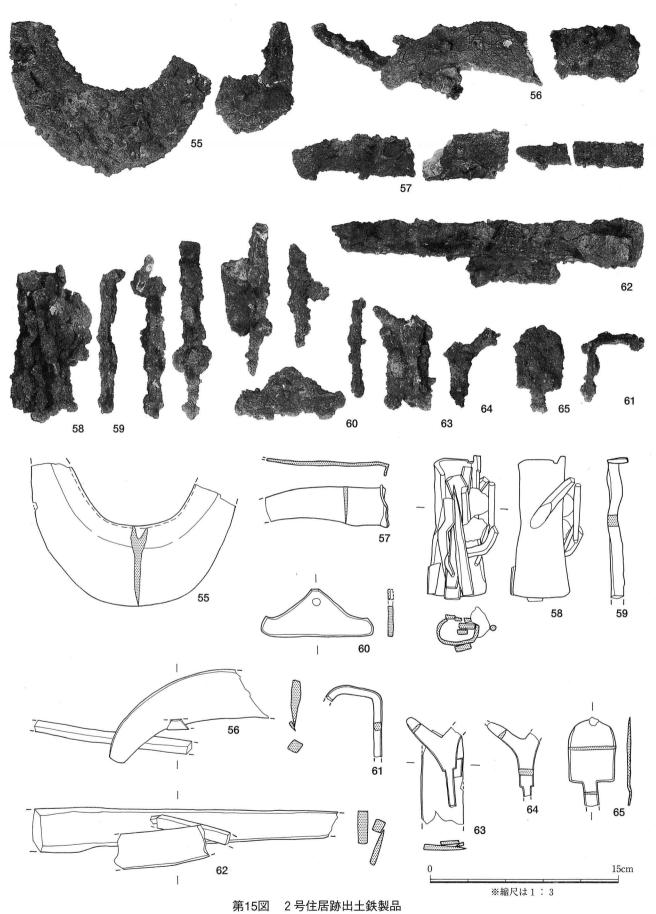
2号住居跡全景(南から)



第14図 6世紀初頭・9世紀後半

※スクリントーンは焼土及びカマド部分。縮尺は1:120。





第4表 出土遺物観察表 2号墳

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼 成	色調	備考
. 1	須恵器 蓋	(11.4)	天井部に回転篦削りを施す。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	
, 2	須恵器 甕	(14.8) (2.5)	口縁部に波状文を施す。	白色粒を含む	良好	暗灰色	
3	土師器 高坏	⟨6.9⟩	脚部片。体部外面は篦削り、坏部内面に篦磨き を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	

3 号墳

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼 成	色 調	備	考		
1	須恵器 坏	(2.5)	体部片。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	灰色				
2	須恵器 蓋	(12.8)	口縁部片。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色				
3	須恵器 蓋	(3.1) (12.1) (3.2)	天井部に回転篦削りを施す。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色				
4	土師器 高坏	(12.2)	 坏部片。体部外面は篦削り、口縁部は横撫でを 施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色				
5	土師器 高坏		門が開かる。 脚部片。体部外面は篦削り、坏部内面は篦磨き を施す。 外面赤彩。	長石・白色粒を 含む	やや甘い	暗赤褐色				
6	土師器 高坏		アドロがから。 おおけ。体部外面は篦削り、坏部内面は篦磨き を施す。 外面赤彩。	長石・白色粒を 含む	良好	暗赤褐色				
7	土師器 高坏	⟨10.5⟩	脚部片。体部外面は篦削りの後、撫でを施す。	長石・白色粒を 含む 砂っぽい	甘い	明褐色				
8	須恵器 高坏	⟨5,2⟩	脚部に孔が3ケ所確認される。	白色粒・黒色粒を含む	良好	灰色				
9	須恵器 平瓶?	<4.8>	頸部片。外面に波状文が施される。	白色粒を含む	良好	暗灰色		-		
10	須恵器 瓶類	<4.1>	体部上半部片。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色				
11	須恵器 平瓶		体部全体にカキ目が施される。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色				
12	須恵器 平瓶		体部下端に篦削りが施される。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	灰白色				
13	小玉		直径(0.8)・厚さ0.6・重さ0.19g							
14	小玉	ガラス製。	直径0.8・厚さ0.6・重さ0.54g			·				
15	小玉	ガラス製。	直径0.7・厚さ0.4・重さ0.38g							
16	小玉	石製。 直	径0.7・厚さ0.4・重さ0.49g							
17	丸玉	水晶製。	直径1.3・厚さ1.0・重さ2.26g							
18	丸玉		T製と見られるが、ガラス製の可能性も有する。直径1.2・厚さ1.1・重さ1.88g							
19	管玉		直径1.1・長さ2.1・重さ1.24g							
20	棗玉 —————	琥珀製。	直径2.2・長さ2.4・重さ6.62g 							

※()は復元値、〈 〉は残存値

住居跡

主居品							
番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼 成	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	31.6	体部中程に刻み施した隆帯をめぐらし、口唇部 にも刻みを施す。	石英・白色粒・ 繊維を含む	良好	褐色	3 号土坑
2	弥生土器 壺	<4.5>	口縁部は付加条1種縄文を施した後、棒状工具により刺突する。	石英・白色粒を 多量に含む	良好	暗褐色	3 号住居跡
3	弥生土器 壺	9.4	底部は平底で、木葉痕が確認される。体部は付加条1種縄文を施文する。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	3 号住居跡
4	弥生土器 壺	13.7	体部外面及び口縁部は、付加条1種、内面は篦 状工具による撫でを施す。口唇部は縄文原体の 押捺による刻みを加える。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	7 号住居跡
5	弥生土器 壺	14.4	口縁部及び体部中程は付加条1種縄文、内面は 篦状工具による撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	11号住居跡
6	弥生土器 壺	7.2	底部は平底で、内面は篦削りの後撫でを施す。 外面に木葉痕が確認される。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	11号住居跡
7	土師器 変	(11.0)	胴部外面及び口縁部内面に刷毛目を施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	6 号住居跡
8	土師器 坩	2.4	体部外面は篦磨き、内面は篦撫でを施す。	白色粒を含む	良好	明褐色	6号住居跡
9	土師器	9.0	体部外面は篦削りの後篦磨き。口縁部は横撫で、 頸部は篦磨きを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	8号住居跡
10	土師器	10.7	体部外面は篦削り、内面は篦磨き、口縁部は横 撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	赤褐色	5 号住居跡
11	日4 土師器 坏	5.8	体部外面は篦削り、内面は篦撫で。口縁部は横 撫でを施す。	石英・白色粒を 少量含む	良好	褐灰色	5 号住居跡
12	出師器 坏	5.8	底部に煤が付着する。 体部外面は篦削り、口縁部は横撫でを施す。	石英を含む	良好	赤褐色	10号住居跡
13	B4 土師器 甕	4.9 10.8 4.0	体部外面は篦削り、口縁部は横撫でを施す。 底部は平底気味で木葉痕が確認される。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	10号住居跡
14	土師器 「坏	7.5 (10.0) 5.4	縁部は横撫でを施す。	砂粒を含む	良好	赤褐色	10号住居跡
15	上師器 高坏	(10.0)	内外面赤彩。 体部外面は篦削り後撫で。坏部内面は放射状の 篦磨き、口縁部は横撫でを施す。	砂っぽい 石英・白色粒・ 黒色粒を含む	良好	褐色	10号住居跡
16	月 須恵器 蓋	· ·	天井は回転篦削りを施す。 TK47。	白色粒・黒色粒 を含む	良好	暗灰色	10号住居跡
17	須恵器 高坏	3.7> 14.4 8.7	脚部外面にカキ目、坏部内底面に同心円の磨り 消し痕が確認される。	多く鉄分も少量	良好	灰~褐灰色	10号住居跡
18	土師器	11.0 17.8 6.5		含む 石英・白色粒を 多量に含む	良好	褐灰色	10号住居跡
19	土師器	28.5 14.4 5.7	体部外面は篦削り、口縁部は横撫でを施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	暗赤褐色	1 号住居跡
20	A 5 土師器 坏	12.0 8.4	体部外面は篦削り、内面は篦撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	やや甘い	明褐色	1 号住居跡
21	土師器 高坏	13.8		石英・白色粒を 含む	やや甘い	暗赤褐色	1号住居跡
22	土師器 甕	20.4 11.3		石英・白色粒を 含む 砂っぽい	良好	明褐色	1 号住居跡
23	須恵器 蓋	18.5	TK47°	白色粒・黒色粒を含む	良好	灰色	4 号住居跡
24	土師器 高坏	15.6 10.4 10.0	体部外面に篦削りを施す。	石英・白色粒を 含む 砂っぽい	良好	褐色	4 号住居跡
25	土師器 坏 A 2	13.8	体部外面は篦削り、内面は放射状の篦磨き、口 縁部は横撫でを施す。 内外面赤彩。		良好	暗赤褐色	9 号住居跡

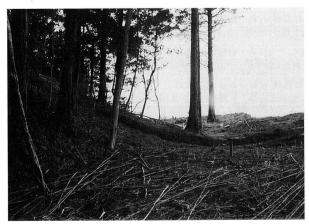
※ () は復元値、〈 〉 は残存値

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	備考
26	土師器 坏 B1	12.6 5.1	体部外面は篦削り、内面は撫で、口縁部は横撫 でを施す。	石英・白色粒・ 砂粒を含む	良好	褐色	9 号住居跡
27	土師器 坏	13.9 5.0 5.1	体部外面は篦削り、内面は撫でを施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	暗赤褐色	9 号住居跡
28	土師器 坏 D3	12.6	体部外面は篦削り、内面は篦撫で、口縁部は横 撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	明褐色	9 号住居跡
29	上師器 高坏	16.6	体部外面は篦削り、口縁部は横撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	やや良い	褐色	9 号住居跡
30	土師器		胴部外面は篦削り、内面は篦撫で、口縁部は横 撫でを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	暗褐色	9 号住居跡
31	土師器 飯	(9.0) 13.9 7.1	単孔の甑である。体部外面は篦削り、内面は篦 撫で、口縁部は横撫でを施す。	含む	良好	明褐色	9 号住居跡
32	A 1 土師器 甕	22.2 19.2 9.0	胴部外面は篦削り、内面は篦撫で、口縁部は横 撫でを施す。	<u>砂っぽい</u> 石英・白色粒を 多量に含む	良好	褐灰色	9 号住居跡
33	土製品 手捏土器	32.5 3.9 ⟨2.3⟩	体部下半片である。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	9 号住居跡
34	土師器 坏 B3	(14.0)	体部外面は篦削りを施す。	石英・白色粒・ 砂粒を多量に含 む	やや甘い	暗赤褐色	12号住居跡
35	土師器 坏 A 5	14.0	体部外面は篦削り、口縁部外面は横撫で、内面 は篦磨きを施す。		良好	明褐色	12号住居跡
36	土師器 - 坏 D 3	(12.4) 6.2 9.4	体部外面は篦削り後撫で、内面は篦撫で、口縁 部は横撫でを施す。 外面赤彩。	石英・白色粒・ 砂粒を含む	良好	暗赤褐色	12号住居跡
37	須恵器 蓋		天井部は回転篦削りを施す。	大粒の長石・白 色粒・黒色粒を 含む	良好	灰色	12号住居跡
38	土師器 甕 D1		胴部外面は篦削り、内面は篦撫で、口縁部は横 撫でを施す。		良好	褐色	12号住居跡
39	須恵器 壺	<4.3>	頸部片。外面に波状文を施す。	白色粒・黒色粒を含む	良好	暗灰色	12号住居跡
40	土師器 坏 A		体部外面は篦削り、内面は削り後撫で、口縁部 は横撫でを施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒を 含む。 砂っぽい	良好	明褐色	13号住居跡
41	土師器 坏 B4	14.6	体部外面は篦削り、口縁部は横撫でを施す。 内外面赤彩。	石英・白色粒を 含む	良好	赤褐色	13号住居跡
42	須恵器 坏	10.7	体部外面に篦削りを施す。 TK47。	白色粒を含む	良好	暗灰色	13号住居跡
43	土師器 高坏	14.4	体部外面は篦削り後撫で、口縁部は横撫でを施 す。	石英・白色粒を 少量含む	良好	暗赤褐色	13号住居跡
44	土師器 高坏	<10.4> <4.7>	底部に脚部の痕跡を残す。 TK47。	石英・白色粒を 含む	良好	灰色	13号住居跡
45	土師器 鉢?	22.6 9.8 <11.0>	体部外面は篦削り、内面は撫で、口縁部は横撫 でを施す。	石英・白色粒を 含む	良好	褐色	13号住居跡
46	土師器 小型甕	4.4 9.6	胴部下端外面は篦削り、内面は篦撫でを施す。	石英・白色粒を 含む 砂っぽい	良好	褐色	13号住居跡
47	土師器 甕 D4	15.8	胴部上半は篦削り、下半は篦磨き、内面は篦撫 で。口縁部は横撫でを施す。	大粒の長石・白色粒・砂利を多量に含む	良好	褐色	13号住居跡
48	土師器 甕 B2	15.5 7.3 22.4	胴部外面は篦削り、口縁部は横撫でを施す。	<u> </u>	良好	褐色	13号住居跡
49	土師器 甑 A 2	29.6 8.3 18.2	単孔の甑である。体部外面は篦削り、内面は篦 磨き、口縁部は横撫でを施す。	石英・白色粒・ 黒色粒を含む	良好	明褐色	13号住居跡
50	土師器 坏	11.6 5.3 3.9	底部及び体部下端は手持ち篦削りを施す。	石英・白色粒・ 黒色粒を含む	良好	明褐色	2 号住居跡

※()は復元値、〈 〉は残存値

番号	器形	口径 底径 器高(cm)	成・整形の特徴	胎土	焼 成	色調	備考			
51	土師器 坏	13.0 底部及び体部下端に篦削り、内面は篦磨きを施 石英・白色粒を 良好 褐灰色 名む 4.5 内面黒色処理。								
52	須恵器 坏	12.6 6.1 4.0	民部及び体部下端に、手持ち篦削りを施す。	石英・白色粒を 含む	未還元	褐灰色	2 号住居跡			
53	須恵器 Ⅲ	13.4 5.8 2.0	民部及び体部下端は、手持ち篦削りを施す。	石英・白色粒を 多量に含む	不良	褐配色	2 号住居跡			
54	須恵器 甕	19.6 (6.3) 指 31.2	同部外面は篦削り、内面は篦撫で、口縁部は横 無でを施す。	石英・白色粒・ 砂利多量に含む	良好	明褐色	2 号住居跡			
55	鉄製品 鋤	全長〈11.0〉・幅6.2・厚さ0.5・重さ235g								
56	鉄製品 鎌・釘	鎌:全長〈12.9〉・幅3.6・厚さ0.5g。釘:全長〈12.6〉・幅0.9・厚さ0.9・総重量135g 鎌・釘・刀子が銹着している。								
57	鉄製品 鎌	全長〈9.9〉・幅2.9・厚さ0.3・重さ30g 右鎌である。								
58	鉄製品 斧·釘·刀子	全長〈11.3〉・幅3.3・厚さ0.4・総重量320g 鉄斧・鉄釘・刀子が銹着している。								
59	鉄製品 釘	全長〈11.2〉・幅0.9・厚さ0.9・重さ38g								
60	鉄製品 火打金	全長〈8.8〉・幅3.7・厚さ0.4・重さ40g								
61	鉄製品 鉸具?	全長 〈 5.6〉・幅0.6・厚さ0.6・重さ17g								
62	鉄製品 直刀·鎌·釘	直刀:全長〈24.3〉・幅2.5・厚さ0.8 茎部片。鎌:全長〈7.4〉・幅2.9・厚さ0.5・総重量320g 直刀・鎌・釘が銹着している。								
63	鉄製品 鏃・鎌	鏃:全長7.5・鏃身幅1.0・厚さ0.3・茎部幅0.5・厚さ0.5。鎌:全長〈7.3〉・幅3.3・厚さ0.5・総重量 50g 鎌・雁股鏃が銹着している。								
64	鉄製品 鏃	全長〈7.9〉・鏃身幅0.9・厚さ0.4・茎部幅0.6・・厚さ〈0.5〉・重さ25g 雁股鏃である。								
65	鉄製品 鏃	全長 〈 7.0〉	・鏃身幅3.7・厚さ0.3・茎部幅1.0・厚さ0.2・	重さ30g			2号住居跡			

※()は復元値、〈 〉は残存値



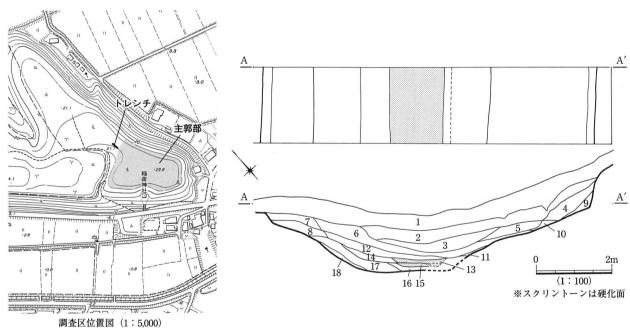
空堀現況(北東より)



同 検出状況(西より)

城館

小野川の河川交通及び東町方面への渡河地点を掌握するのに適した、島状地形の東端部に立地する。郭の平面形状は東西90m、南北50mの台形状で、南側に1号墳、北西に8号墳が位置する。今回、8号墳西側の現道上に幅2mのトレンチを1本設定し、調査に臨んだ。この結果、上端幅8.5m、下端幅2.5m、深さ1.2mの空堀が検出され、現道下には空堀が埋蔵されていることが明らかとなった。この空堀は、一定期間に亘って堀底を道としており、硬化面が確認されている。道の機能時期以降には、堀浚いは行われておらず、城館と同時期もしくは、終焉後に使用されたと考えられるが、空堀の位置を考慮すると、空堀掘削後ある程度の時期を経て空堀に道機能を付帯させたと判断される。8号墳は古墳としているものの、北へ延びた空堀を通路とした場合、8号墳を土台として隅櫓を構築すれば、堀底道を監視するのに適した場所に位置しており、道は城館機能の一部を担ったと推定される。また、この空堀は、郭の外側に穿たれていることから、これまでの発掘調査においては、中世に関わる遺構は確認されていないが、西に向かい順次下位の郭を配した可能性が考えらる。時期については、検出された空堀は、10m近い堀幅を有し、折れが確認されるなど中世の後半段階の遺構と判断され、Ⅲ項で述べた南北朝期まで遡れるかは現時点では不明である。



第16図 空堀

Ⅴ 所見

第2・3次調査における成果について、これまで古墳・集落・城館に整理して概観してきたが、ここでは、 ①古墳の築造時期、②住居跡の形態、③台地の歴史的様相について所見を述べまとめとしたい。

①古墳の築造時期 2号墳は帆立貝式の古墳であり、築造時期を判断する材料は、箱式石棺と推定される主体部より、出土した須恵器の蓋が1点のみである。埴輪は伴っておらず、全体として出土遺物は少なく、端的に築造時期を決定付けるには弱いが、この須恵器の蓋は、湖西産でかえりを有し、天井部が欠落しているもののつまみが突起状と推定され、湖西編年のII期第4または第5小期の遺物と判断される。主体部の構築位置は括れ部上であり、いわゆる「変則的古墳」(常総型古墳) あるいは、「特異埋葬施設古墳」に包括されるものである。黒沢彰哉氏は常総地域における群集墳の分析を通じて「帆立貝式古墳では、括れ部に主軸と直交して置かれたものが古く、定形化した墳丘に埴輪列を伴うことが多い。主軸と平行になるものは、埴輪が部分的にあるものかまたはなくなってしまったもので、墳形も多様化し時期が降ることが考えられた」と『婆良岐考古』15号の「常総地域における群集墳の一考察」の中で述べている。これらのことや出土遺物を併せ考えると2号墳は7世紀前半頃の築造とみられる。

3号墳は前方後円墳で、主体部内より玉が出土している。その他の遺物については、後円部の周溝より6世紀前半の遺物が、括れ部より7世紀初頭の湖西産須恵器(平瓶・高坏など)が出土している。6世紀前半の遺物に対する理解は、周辺部での該期に盛期を持つ集落が確認されていることより、流れ込みとも判断されるが、後円部に集中することは不自然であるように思われる。更に、墳形を概観した場合、括れ部がしっかりと構築され整った形状を示す。このことから、墳形自体は6世紀前半の築造によるもので、この時点で埋葬施設は後円部に営まれ、7世紀初頭にそれまでの墳形を利用して新たな埋葬施設を括れ部上に構築し、その際に供献された遺物が出土している可能性が考えられた。これらは推測の域を脱しないが、この場合後円部の埋葬施設は削平により消失したものと理解される。ただ6世紀前半の築造とした場合、埴輪は確認されないなど疑問点も残る。いずれにしろ今回検出された埋葬施設の構築時期は7世紀初頭に比定される。

②住居跡の形態 住居跡の形態についてはすでに概観を述べているが、今回の調査の集落は6世紀の初頭に盛期を持っており、いわゆる初期竃の資料が得られ、TK208あるいはTK23と、TK47の須恵器が出土している。これらの住居跡の形態は、ほぼ正方形で出入り口が想定され、竃はこの出入り口の左右に貯蔵穴を伴い付設される。この形態は、茨城県教育財団により調査が行われた星合遺跡15号住居跡と類似するもので、同型の須恵器も出土していることから、県南におけるこの時期の資料を追加することができた。

③台地の歴史的様相 今回の調査及び第1次調査の成果を踏まえて、遺跡の立地する台地について概観すると、縄文時代早期末の茅山期において炉穴が検出されており、本台地における人の営みを初めて確認することができる。続いて数量的には中期前葉の阿玉台式の土器片が得られているものの、遺構は確認されておらず、周辺地域に集落跡などの埋蔵が示唆される。集落が確認されるのは、弥生時代後期においてであり、その後集落は断続的に営まれ、6世紀初頭に盛期を持つことが明らかとなっている。この時期より台地の南端では、古墳の造営が7世紀前半頃まで続けられ、再び集落が営まれるのは、今のところ9世紀後半に入ってからである。中世に至ると、文献史料により南北朝期の「楯」の存在が指摘されるが、城館として遺構が確実に認められるのは、中世後半においてである。

以上3点についてまとめてみたが、町の発掘調査も本地域に集中しており、古墳の調査も9基を数える。 今後これらを体系的に捉え直すことにより、点であった調査事例がやがて線として繋がることを期待したい。

		Staffs 1	Marie Co.	The second	The State of								
フリガナ	タテノダイコフングン					A COLOR	1912/19						
書 名	楯の台古墳群												
副書名	第2・3次発掘調査報告書												
編著者名	間宮正光 高野浩之												
編集機関	山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 TEL 0476-24-0536												
発行機関	江戸崎町教育委員会 =	F300 - 050	4 茨城県	稲敷郡江	戸崎町大	字江戸崎甲	2148-2						
	TEL 0298-92-4110												
発行年月日	西暦2001年3月30	西暦2001年3月30日											
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因					
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	コレポ年	木作	DH 11.701 [F]	po el mag	EN MERCH					
精の台古墳群	イバラギケンイナシキケンエ ドサキマチ 茨城県稲敷郡江戸崎町		35度	140度	19981024~								
The same of the same of	The second secon	08440	町022	58分	20分 25.1529秒	10000000	1,470m ²	土砂採取事業					
第 2 次調査	大字佐倉字楯の台2728外			29.5533秒	25.152949	19990206							
	茨城県稲敷郡江戸崎町	Listrer.		35度 58分	140度	19991104~	1,950m ²	土砂採取事業					
第 3 次調査	大字佐倉字楯の台	08440 町022		58分 20分 24.6382秒 23.6660秒		19991204	1,950111	工的环状手术					
完 小 事 叶 友	1926-7外 種 別 主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項							
所収遺跡名	集落跡 弥生時代後期			縄文土器片 (早・中期)		2号墳は、7世紀前半頃							
第2次調査	The state of the s	他)		弥生土器片 (後期)		に築造された帆立貝式古							
第 2 次 調 宜	一口惧 口惧时队	土坑				墳で、3号墳は、墳丘の							
A CONTRACTOR		古墳	The second secon			高坏·平瓶	2 次利用の可能性が想定						
				玉:ガラス製小玉、		されるが、検出された主							
		方後円墳)		水晶製丸玉、			体部は7世紀初頭の所産						
				琥珀製管玉·棗玉		である。この主体部は、							
						箱式石棺で、ガラス・琥							
- The same of						珀・水晶を材料とした玉							
						類が出土している。 6世紀初頭に盛期を持っ							
楯の台古墳群	Control of the Contro	住居跡					And the Party of Street of the						
第 3 次調査		炉穴		弥生土器片 (後期)			た集落で、初期竈の資料 が得られている。これら						
	古墳時代	土坑	10基	The second second		下·坩·甕·甑	The second second						
	平安時代	空堀	1条		・曃	to the last		からは、TK208					
	中世	1885		The state of the s	器:坏·皿·蓋·高坏 品:鎌·鋤先·刀子·斧· 鏃·直刀·釘·火打金		あるいはTK23とTK47の 須恵器が出土している。						
				鉄製品			CONTRACTOR OF THE PARTY OF THE	耳上している。					
				・鉸具?			This is						
The state of the state				その他:土玉・管状土錘・									
				CANIE	· 工工 目 砥石·紡		10000						
A. C.					PEN EL AND								

楯の台古墳群

第2 · 3 次発掘調查報告書

印刷 平成13年3月27日 発行 平成13年3月30日 編 集 山 武 考 古 学 研 究 所 発 行 江戸崎町教育委員会 印 刷 株式会社 文化総合企画 千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12 TEL 0476-93-0593